

## 作戦術による戦史分析

### — 日本陸海軍の協同作戦を事例として —

小野 小百合  
村田 篤美

#### はじめに

大東亜戦争において、日本が優勢から劣勢に代わる節目となったのが、ガダルカナル戦と言われている<sup>1</sup>。米軍が新たに水陸両用作戦を開発して反攻を開始し、以後、太平洋をめぐる作戦様相が、艦隊同士による戦いから島嶼をめぐる攻防に転換することとなった。大東亜戦争開戦前の計画策定段階においては、大陸方面は陸軍、太平洋方面は海軍が作戦を受け持ち、南西方面は陸海軍協同とされたが、元来海軍が担当すべき南東方面の要域を防護するため、ガダルカナル戦以降、日本陸軍は膨大な兵力を投入していくこととなった<sup>2</sup>。こうした島嶼をめぐる戦いにおいては陸海軍の緊密な連携が必要となるものの、日本陸海軍は方針を統一することができずに作戦の失敗を繰り返し、多くの犠牲を生むこととなった。

なぜ日本陸海軍は、大東亜戦争における島嶼戦において作戦方針が異なったまま作戦を実施することとなったのか。日本陸海軍の協同作戦に関し、『失敗の本質』においては、ガダルカナル戦は戦略的グランドデザインの欠如や統合作戦の欠如等の理由により米軍の水陸両用作戦に対処しえなかったとされている<sup>3</sup>。関口高史は、ガダルカナル戦の作戦・戦闘に焦点を当てて、上級部隊・現地部隊の戦略次元から現地部隊に至るまでの一貫し

---

<sup>1</sup> 戸部良一他『失敗の本質』中公文庫、1991年(初版は、ダイヤモンド社、1984年)、107頁。ガダルカナル戦とは、南太平洋方面作戦におけるガダルカナル島及び周辺の海空域における戦闘を指す。戦争の呼称については、庄司潤一郎「日本における戦争呼称に関する問題の一考察」『防衛研究所紀要』第13巻第3号、2011年3月、43-80頁を参照。1941年12月8日から1945年8月15日にかけて日本が戦った戦争の呼称には「太平洋戦争」、「大東亜戦争」、「15年戦争」、「アジア・太平洋戦争」がある。どの名称も歴史的経緯からイデオロギー的色彩を帯びているが、本論文では地域適合性や日本国政府により閣議決定された呼称である「大東亜戦争」を使用する。

<sup>2</sup> 近藤新治、竹下高見「南太平洋における陸海軍の統合作戦」『軍事史学』第9巻第1号、1973年6月、81頁。

<sup>3</sup> 戸部他『失敗の本質』135-138頁。

た目的が確立されていなかったことによる、陸海軍の連携の失敗を指摘している<sup>4</sup>。福重博は、硫黄島の戦いを含む中部太平洋の陸海軍の協同作戦が、終始相互の戦略思想の食い違いを見せたまま推移したと論じている<sup>5</sup>。

日本軍の戦略決定は一定の原理や論理に基づくというよりは、多分に情緒や空気が支配し、科学的方法論が個人及び組織に共有されていなかったとされる<sup>6</sup>。米海軍大学のヴェゴ（Milan Vego）は、日本の不適切な「作戦術（Operational Art）」が、ミッドウェー海戦において数の上で有利であった日本の敗北につながったと分析している<sup>7</sup>。作戦術は、西側諸国において1980年代に認識され始めた概念である。この概念は、国家目標を設定し、これに基づいて戦略次元から戦術次元の各階層における目標を明確化し、戦争全体をデザインすることで個々の戦闘をより上位の次元の目標に結びつけ、効果的に軍事活動を実施するものである。日本陸海軍の協同作戦について、作戦術の観点から分析されているものは、南方作戦を対象とする妹尾研作の研究を除き見当たらない<sup>8</sup>。よってこれらを作戦術の観点から分析し、貴重な教訓を整理し活用することは極めて意義のある作業である。

本稿は日本軍の個々の戦闘様相を分析することではなく、陸海軍の協同作戦を作戦術の観点から分析、整理することで、作戦失敗の要因を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。第1節では、作戦術の概念を確認、整理し、第2節では、ケーススタディとしてガダルカナル戦と硫黄島の戦いにおける大本営から現地部隊まで陸海軍の方針の齟齬を整理し、作戦術の観点で分析、整理する。そして第3節において、作戦術の観点からの失敗の要因について分析する。

<sup>4</sup> 関口高史「離島奪回作戦の事例研究」『軍事史学』第52巻第4号、2017年3月、54-74頁。

<sup>5</sup> 福重博「中部太平洋における陸海軍の協同作戦」『軍事史学』第9巻第2号、1973年9月、51頁。

<sup>6</sup> 戸部他『失敗の本質』283-287頁。

<sup>7</sup> Milan Vego, "On Operational Art," *Strategos*, Vol. 1, No. 2, 2017, pp. 30-31, <https://hrcak.srce.hr/190354>.

<sup>8</sup> 妹尾研作「対英米蘭戦争における南方作戦の作戦術的評価」『陸戦研究』平成26年8月号、2014年9月、1-22頁。

## 1 作戦術とは

### (1) 作戦術の意義

ベトナム戦争において、米軍は戦術的な勝利を続けていたのにもかかわらず、戦略的な勝利に結びつけることができなかった。これは個々の戦術行動に政治が介入し、高次の戦略次元を見失って戦略目標を達成することができなかったことが一因である<sup>9</sup>。個々の戦術的な行動が最終的な戦略目標につながるものでなければ、場当たりの対応が累積するだけで戦争に勝利することはできない。それは戦争が総力戦となり、単一の作戦だけでは戦略目標を達成することができず、相互に関連した複数の作戦からなる戦役の勝利が必要になってきたからである。そのため軍事組織は戦争を遂行する上で、こうした国家(戦略)と軍隊の部隊レベル(戦術)の間に横たわる膨大なギャップを埋める役割を果たすことが必要となる<sup>10</sup>。ロシア(ソ連)のスヴェーチン(Alexander Svechin)は、個々の戦闘のためのミクロな「戦術」と、戦闘全体を対象とするマクロな「戦略」を結ぶ両者の中間概念としてはじめて「作戦術」という新しい軍事用語を作り出し、作戦術を明確にした<sup>11</sup>。西側諸国においては、ルトワック(Edward Luttwak)が「失われた領域」として戦略と戦術の間に、作戦次元という概念が欠如していることを指摘し、実際の戦争の状況に適合した用兵指導の必要性を提起した<sup>12</sup>。このように近代の戦争においては、戦略と戦術の効果的な組み合わせなくしては戦争に勝利することは難しい。作戦術の意義とは、戦略と戦術の懸け橋となって軍事活動を効果的に調和させ、戦略目標の達成に寄与することであると言える。

### (2) 戦争の次元と作戦デザイン

作戦術は軍事活動を構想するにあたり、戦争をそれぞれ次元に階層化して検討することを一般化している。英国統合ドクトリン文書においては、戦争を図1に示すように戦略、作戦並びに戦術次元に図示し分類している<sup>13</sup>。

<sup>9</sup> 北川敬三「安全保障研究としての「作戦術」—その意義と必要性」『国際安全保障』第44号第4号、2017年3月、100頁。

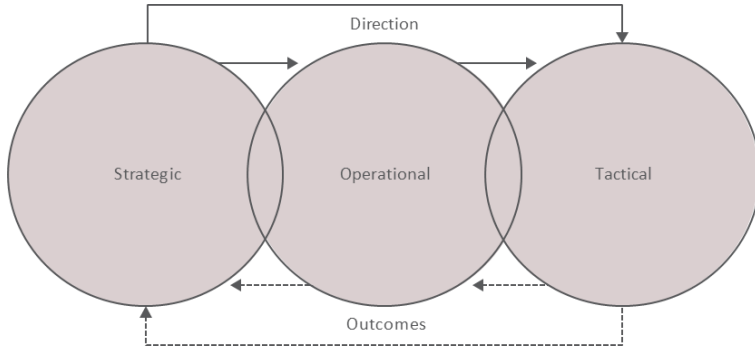
<sup>10</sup> 同上、102頁。

<sup>11</sup> 田村尚也『用兵思想史入門』作品社、2016年、300頁。

<sup>12</sup> Edward N. Luttwak, "The Operational Level of War," *International Security*, Vol. 5, No. 3, Winter 1980-1981, pp. 61-62.

<sup>13</sup> Ministry of Defence, *JDP 0-01 5th edition*, Ministry of Defence, 2014, p. 19.

図1 戦争の次元とその関係



(出所) Ministry of Defence, *JDP 0-01 5th edition*, 2014, p. 19.

国家や戦略目標について考察する次元は「戦略次元 (Strategic Level)」であり、政府や統合軍司令部がこれを所掌する。敵との会戦や戦闘について考察する次元は「戦術次元 (Tactical Level)」であり、隊司令部、部隊等がこれを所掌する。この戦略次元と戦術次元の中間に位置し、両者をつなげる次元が「作戦次元 (Operational Level)」であり、艦隊司令部などが所掌する。戦争の各次元については、階層構造であるが明確な区切りはなく、重なりをもって密接な関係を構成している。このように「作戦次元」という中間の概念を明確化することで、戦略と戦術と関連した全体像を構築するとともに、いままで軍隊同士の交戦であった軍事行動に、戦略目的の達成のための一貫した関連付けを行うことができるといえる。

作戦を計画し、実施する上で作戦の全体像を描くことを作戦デザインと言い、その過程で作戦術の理解が必須となる。作戦デザインとは、作戦環境を整理して理解する方法論であり、作戦デザインの構成要素には作戦環境の理解、戦略的ガイダンスの理解、作戦のアプローチ及びどの問題に対処するべきかという問題の定義がある。これらは相互に作用しており、これらを作戦術により継続的に適用及び評価している<sup>14</sup>。以上を用いて作戦デザインを考えていく基本的な流れは、次のとおりであり、これはつまり、どのように目的を達成していくかという過程である<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> Joint Chiefs of Staff, *JP5-0 Joint Planning*, June 2017, pp. IV-6 to IV-7.

<sup>15</sup> Department of the Navy (USA), *NWP5-01 Navy Planning*, Headquarters Department of the Navy, 2013, pp. I-2-I-3; Patrick C. Sweeney, “*Operational Art Primer*,” The United States Naval War College Joint Military Operations Department, July 16, 2010, pp. 2-7.

- ① 国家レベルの所望結果 (Desired End State : DES) を明らかにする。DES には、政治、外交、軍事、経済、社会、情報、環境及び紛争に関連するその他すべてを網羅する。
- ② DES を踏まえて、戦略目的を設定する。
- ③ 戦争の各次元 (作戦、戦術等) における目的を設定する。
- ④ 各次元において、作戦要素 (Operational Factors) (時間、空間、兵力) を検討する。
- ⑤ 我と敵の重心 COG (Center Of Gravity) 等を明らかにする。そこでは、CC (Critical Capability : 死活的な能力)、CR (Critical Requirement : 死活的に必要なもの)、CV (Critical Vulnerability : 死活的な弱点) を明らかにする。
- ⑥ 作戦デザインとして作戦の全体像を描き、計画を策定する。

このうち、①②③は目的を設定する過程、④⑤⑥は目的達成のための計画策定の過程ということが出来る。このように、作戦計画を策定するにあたっては、まず目的を明確化する必要がある。

米海軍の作戦計画作戦手順書である Navy Warfare Publication (NWP) 5-01 では、指揮官や幕僚は、作戦術の考え方を適用することが計画立案の過程において必要不可欠であるとしている<sup>16</sup>。

それでは指揮官等は作戦術を活用して作戦計画及び命令を策定する際、どのような事項について考慮する必要があるのだろうか。米統合ドクトリンにおいては作戦術と作戦デザインの関係性を次のように定義している<sup>17</sup>。

指揮官等は、JPP (筆者注 : Joint Operation Planning Process の略) と作戦術・作戦デザインを有機的に連携させて計画及び命令を策定する。また計画作成に当たっては、Ends (目的) を達成するために、戦争のアートとサイエンスを発揮して、受容可能な Risk (危険) を常に勘案しつつ、Ways (方法)、Means (手段) を最適に統合する。

指揮官等がまず考慮しなければならないのが Ends である。現在の状態から DES へ変えるために、すべての軍事行動を戦略目的の達成へ仕向けなければならない。DES は、政治指導者が達成したいという究極の状態や効

---

<sup>16</sup> NWP5-01, pp. I-2-I-3.

<sup>17</sup> Office of the Chairman of the Joint Chiefs of Staff, *DOD Dictionary of Military and Associated Terms*, November 25, 2019, p. 164.

果であり、政治、外交、軍事、経済、社会、情報、環境等様々な側面を含んでいる<sup>18</sup>。よって軍事組織は単に軍事的勝利のみを目指すものではなく、戦略目標達成に寄与すべく **Ends** を設定することが必要である。

また統合ドクトリンでは、指揮官が作戦を立案する際の基本事項の1つに、4つの質問に答えることを求めている<sup>19</sup>。

- ① **Ends** 戦略目標を達成するためにはどのような軍事条件が達成されなければならないのか、また達成するためにどのような条件が必要なのか。
- ② **Means** これらの一連の行動を達成するためにどのようなリソースが必要か、またどのような機能や他のリソースが利用可能なのか。
- ③ **Ways** これらの一連の行動を達成するためにどのようなアプローチが必要か、またどのような資源が必要か。
- ④ **Risk** これらの一連の行動を実行することで発生する可能性があるリスクは何か、また代償とは何か。

4つの質問について、指揮官は作戦が戦略目標に寄与しているか分析し、行動の手段を選択し資源配分を調整するとともに、リスクを緩和する策を講じることとなる。また戦略目標と任務がミスマッチした場合には、**Ends** を修正、変更することが期待されている。

### (3) 作戦術とドクトリン

片岡徹也はドクトリンを「問題を客観的に処理するための共有化された方法論、問題解決手順」と述べている<sup>20</sup>。作戦を立案する際、従前の方法が実際に直面する戦争に必ずしも合致するとは限らない。そのため合致しない場合には新たな方法を見出さなければならない。「ドクトリンは何を考えるかではなく、どう考えるか」であり、「ドクトリンは、主導的で独創的な思考法を進める」とも定義されている<sup>21</sup>。したがってドクトリンとは戦闘の原理原則を示すものではなく、最善の行動方針を導くための方法論であるといえる。

---

<sup>18</sup> 下平拓哉『日本の海上権力—作戦術の意義と実践』成文堂、2018年、9頁。

<sup>19</sup> Joint Chiefs of Staff, *JP3-0 Joint Operations*, January 17, 2017, P. II-4.

<sup>20</sup> 片岡徹也『歴史群像シリーズ 太平洋戦争⑤—消耗戦ソロモン・東部ニューギニアの死闘』学研パブリッシング、2010年、23頁。

<sup>21</sup> Department of the Army, *FM3-0 Operations*, 2008, p. D-1.

ではドクトリンがなぜ軍事組織に求められるのか。それは戦争が大規模となり、軍事組織の行動に関して思想の共有化を図る必要性が生じたからである。つまり、ドクトリンという戦争に備えるべき基本的な考え方をあらかじめ提示しておくことで、広範多岐にわたる領域において場当たりのな作戦が実行されるのを防ぐことができる。このようにドクトリンは、軍事組織に共通の哲学、共通の言語、共通の目的、努力の集中をもたらし、戦い方を律するものであるといえる。しかし脅威の多様化、作戦環境の変化、科学技術の進展等を踏まえ、ドクトリンは絶えず見直し改訂をすることが求められる。複雑な要素が絡み合う近代の戦争で勝利するためには、戦略と戦術の効果的な組み合わせが必要となっている。作戦術は戦略と戦術をつなぐ柔軟な発想と応用を導く方法論であり、そのため下平拓哉は作戦術をドクトリンの基礎をなすものとして理解することが極めて重要であると述べている<sup>22</sup>。

本節では作戦術が、戦争の各次元における軍事活動を効果的に調和し、戦略目標の達成に引導するための方法論であり、またドクトリンを下支えする問題解決のための思考法であることが確認できた。次節では、大東亜戦争の事例としてガダルカナル戦と硫黄島の戦いについて、ケーススタディを行い作戦術の視点で分析・整理していく。

## 2 作戦術の視点から見た陸海軍協同作戦の分析

本節において、ガダルカナル戦と硫黄島の戦いを例として、戦争の次元に分類し、作戦術の観点から戦略次元・作戦次元に分けて分析・整理する。

### (1) 大東亜戦争における「戦争の次元」

北川敬三は、作戦術は軍事組織に特有の方法の一つとして、政策の実現の手段として国家・軍事戦略を、戦術次元まで橋渡しする概念であると述べる<sup>23</sup>。

連合艦隊司令部というのは、内戦部隊の鎮守府と支那方面艦隊、海上護衛総司令部とを除いた外戦部隊(海上兵力、航空兵力)を統括した司令部

---

<sup>22</sup> 下平『日本の海上権力』8頁。

<sup>23</sup> 北川敬三「軍事組織における問題解決の方法論に関する研究—高等教育、ドクトリン、作戦術」慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科博士論文 2017年度(平成29年度)、2017年、24-25頁、[http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/download.php?koara\\_id=KO90001001-20174851-0003](http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/download.php?koara_id=KO90001001-20174851-0003)。

である。つまり連合艦隊は、日本海軍の実戦部隊の頂点に立つ機構であり、主に作戦次元を担っていたといえる<sup>24</sup>。

北川の議論は、戦略と戦争のレベルを対比している点で実用性が高い。ただし、当時の日本は、軍事が政治から独立し、対等の立場にあったため、略略と戦略の区分为困難であること、本稿の事例では戦術と術科・技術を区分する必要性に乏しいことから、図1に示した英軍ドクトリンに倣い、戦略、作戦、戦術の3つの次元に区分して分析する(表1)。

表1 戦争の次元及び戦略—戦争のレベル

	戦略のレベル	戦争のレベル	管轄	ガ戦担当	硫黄島戦担当
戦略次元	政策(Politics)	戦争(War)	政治	政府 海軍省 陸軍省	
	戦略(Stratgy)			大本営陸軍部 大本営海軍部	
作戦次元	作戦(Operation)	戦役(Campaign) 会戦(Major Operations) 作戦(Operation)	用兵	【海】連合艦隊 【陸】第17軍	【海】連合艦隊 【陸】小笠原兵团
戦術次元	戦術(Tactical)	戦闘(Battle)		【海】南東方面部隊 (第11航空隊艦隊、 第4艦隊、第8艦隊 等) 【陸】一木支隊、川 口支隊、第2師団等	【海】 第3航空艦隊 【陸】 混成第2旅団等
	術科・技術(Technical)	戦闘(Combat/ Engagement)		【海】第11航空隊 艦隊、第4艦隊、第 8艦隊等 【陸】一木支隊、川 口支隊、第2師団等	【海】 第27航空戦隊等 【陸】 混成第2旅団等

(出所) 北川「軍事組織における問題解決の方法論に関する研究」  
25 をもとに、筆者作成。

## (2) 戦略次元における分析

### ア ガダルカナル戦

ヴェゴは、第二段作戦の失敗は防衛線を広げる上で、どの方面に力を注ぐべきか不明確であり、陸海軍で整合が取れなかったことを指摘する<sup>25</sup>。そ

<sup>24</sup> 佐藤和正『運と戦術 太平洋戦争の決定的瞬間の研究』光人社、1988年、154頁。連合艦隊司令部については、錯誤の恐れがない限り「連合艦隊」と呼称する。

<sup>25</sup> Milan Vego, "The Port Moresby-Solomons Operation and the Allied Reaction, 27 April-11 May 1942," *Naval War College Review*, Vol. 65, No. 1, 2012, p. 139. なお、第二段作戦は、正式には海軍第二段作戦であり、陸軍は相当する作戦計画



して、連合艦隊が作戦計画に多大な影響を与えていたことを問題視している<sup>26</sup>。

1942年3月、大本営内において第二段作戦に関する連絡会議が開催された。海軍部は敵を守勢に立たせるため、豪州の攻略を目指す攻勢作戦を主張するのに対し、陸軍部は大陸方面の作戦を主張し、真っ向から対立することとなった。陸軍部から豪州攻略のための船舶と兵力は派出できないと反対されたことから、海軍部はフィジー、サモア、ニューカレドニアを攻略し、米豪の連絡線を遮断するという案を立てた<sup>27</sup>。それでもなお、豪州の一部攻略案を捨てずに陸海軍部間の折衝が続けられる等、戦略次元を担う大本営海軍部内でも意見の不一致があったといえる<sup>28</sup>。

こうして大本営は海軍と陸軍の間で、作戦構想の一致が実現できないまま第二段作戦が開始されることとなった。

また、連合艦隊において戦務参謀であった渡邊安次は、海軍内においても連合艦隊の幕僚と大本営海軍部の参謀の調整ができていなかったと述べている<sup>29</sup>。真珠湾攻撃後から第二段作戦について検討していた連合艦隊は、幾度も作戦案を大本営海軍部に断られた経緯から、1942年3月に陸軍なしに実施可能な米空母の殲滅作戦を計画した<sup>30</sup>。その計画は、まずポートモレスビー攻略、次いでミッドウェイを攻略占領し、反撃に出た米空母を撃滅する。次にフィジー・サモア（FS）作戦により米豪遮断を図り、ハワイ攻略を実施して早期講和に持ち込める条件を作り出すというものであった。一方、大本営海軍部は、攻勢作戦によって連合国の反攻拠点である豪州を米国から遮断するため、FS作戦の実施を主張した。このように大本営海軍部が早期のFS作戦による米豪遮断を、連合艦隊はFS作戦の前に米空母の撃滅を主張し、作戦次元を担う連合艦隊との間でも意見が完全に分かれることとなった<sup>31</sup>。

こうして大本営海軍部と連合艦隊で作戦構想の統一が実現できないまま、1942年4月16日、ミッドウェイ作戦を発令し、連合艦隊は同日付で第二

---

を有していなかったが、本稿では第一段作戦・南方作戦後の日本陸海軍の作戦を第二段作戦と呼称する。

<sup>26</sup> Ibid.

<sup>27</sup> 千早正隆『連合艦隊始末記』出版協同社、1980年、154頁。

<sup>28</sup> 水交会編『帝国海軍 提督達の遺稿 小柳資料 下』水交会、2010年、155、345頁；防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈2〉—昭和十七年六月まで』朝雲新聞社、1975年、315頁。

<sup>29</sup> 春山和典『海軍 散華の美学』月刊ペン社、1972年、201頁。

<sup>30</sup> 同上、203-219頁。

<sup>31</sup> 同上、221頁。

段作戦の発動を全軍に示令した<sup>32</sup>。ミッドウェイ攻略作戦失敗後、大本営海軍部は FS 作戦の中止を決定するも、連合艦隊に対して米豪遮断の前進基地とする目的で、ガダルカナル島に飛行場の新設を指示した<sup>33</sup>。陸軍がほとんど知らなかったといわれるこの飛行場の設営が、後のガダルカナル戦のはじまりとなった<sup>34</sup>。

表2のとおり、ガダルカナル戦は、第二段作戦の計画段階から問題があった。軍事行動における陸軍と海軍の作戦構想が一致していなかったということである<sup>35</sup>。このような背景の中、ガダルカナル戦は、海軍は連合軍の本格的な反攻、陸軍は一局地戦であるという認識から始まっていったのである<sup>36</sup>。

表2 第一段作戦後の作戦構想

		作戦構想
大本営陸軍部	持久戦略	大陸方面重視。戦略的守勢による長期不敗態勢の確立
大本営海軍部	決戦戦略	フィジー、サモア、ニューカレドニア攻略作戦による米豪連絡線の遮断
連合艦隊		ミッドウェイ攻略作戦により米機動部隊の撃滅

（出所）黒野耐「破局への戦略」を生んだ有名無実の戦争指導」27-31頁を参考に筆者作成。

#### イ 硫黄島の戦い

次に、硫黄島の戦いにおける戦略次元の問題を分析する。1944年8月に日本はマリアナ諸島を失陥し、戦略的持久態勢を構築するとした絶対国防圏構想は破たんすることとなった。大本営は今後採るべき作戦計画及び戦争指導方針の検討を開始し、太平洋方面の敵進攻判断について、硫黄島を

<sup>32</sup> 千早『連合艦隊始末記』155頁；春山『海軍 散華の美学』203-219頁。

<sup>33</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 南東方面海軍作戦〈1〉』朝雲新聞社、1976年、375頁。

<sup>34</sup> 服部卓四郎『(明治百年史叢書)大東亜戦争全史』原書房、1965年、327頁。

<sup>35</sup> 黒野耐「破局への戦略」を生んだ有名無実の戦争指導」片岡徹也他編『歴史群像シリーズ 太平洋戦争④「第二段作戦」—連合艦隊の錯誤と驕り』学研パブリッシング、2009年9月、30-31頁。

<sup>36</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈3〉—昭和十八年二月まで』朝雲新聞社、1974年、235-236頁。

含む小笠原方面にまず来攻し、その後本土、南西諸島、台湾及び比島方面に敵の主反攻正面が来攻する公算が大と見積もった<sup>37</sup>。海軍はマリアナ沖で空母機動部隊及び基地航空部隊を大きく消耗するなど、戦局を挽回することは厳しい状況にあった。戦機をとらえて戦勢の転換を作為するためには、重点を形成し、乏しい戦力を最も効果的に運用する必要が生じた<sup>38</sup>。そこで大本営陸海軍部は、共通の次期作戦計画ともいうことができる作戦指導大綱を策定しようとの考えに傾き、本土～台湾～南西諸島～比島の線で決戦を指導する「陸海軍爾後ノ作戦指導大綱」が決定された。

1944年8月、政府及び大本営は天皇親臨の最高戦争指導会議を開催し、敵の主反攻正面に対して陸海軍戦力の主力を展開し、来攻する敵に決戦を指導し、戦局の転換を図ることが決定された。一方、米軍も日本本土への進攻及び戦略爆撃実施の上で重要な位置にあった硫黄島の戦略的価値に注目し、1944年9月に攻略し利用することを決定していた<sup>39</sup>。

ここで陸海軍の硫黄島の防備方針について考察する。大本営は硫黄島を含む小笠原方面を本土防衛の一環として優先的にその強化を図り、米軍の来攻があれば、基地航空機の威力圏内で邀撃、撃滅して島の確保を図ることを企図した<sup>40</sup>。陸軍部は当初から硫黄島の戦備を強化するとともに、敵の上陸があれば機動反撃戦力を投入するとしていた。一方大本営海軍部は、当時の水上戦力の現状では適宜小笠原方面に戦力を投入できるか否かに疑問があり、また、同方面に有効な基地航空攻撃を指向しうるか否かにも問題があるとの結論を出している<sup>41</sup>。こうした状況から、大本営は陸海軍合同で成案した作戦指導大綱において、小笠原方面は状況により決戦を行うというあいまいな作戦方針とした。そのため、硫黄島の防備について明確な目的が示されないまま作戦が推移したものと考えられる。他方、大本営は「小笠原諸島に於ける陸海軍間の指揮関係に関する陸海軍中央協定」を締結し、首席指揮官である栗林陸軍中將が陸海軍部隊を統一指揮することとしたものの、航空作戦は除くとされ、作戦準備は陸軍と海軍で別々に行われることとなった。

<sup>37</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部〈9〉—昭和二十年一月まで』朝雲新聞社、1975年、45頁。

<sup>38</sup> 同上、44頁。

<sup>39</sup> 陸戦史普及会編『硫黄島作戦』原書房、1970年、97頁。

<sup>40</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈7〉—戦争最終期』朝雲新聞社、1976年、214頁。

<sup>41</sup> 防研戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部〈9〉』52頁。

表3 1945年1月までの硫黄島の戦いにおける作戦構想

		作戦構想
大本営陸軍部	航空戦力の集中 海上機動反撃	離島及び本土沿岸要域の防備強化 来攻する敵の撃破及び要域の確保
大本営海軍部		基地航空兵力による敵艦隊及び敵進 攻兵力の撃滅 飛行場の確保と敵の利用阻止

(出所) 下河邊「硫黄島作戦の一考察—海軍砲台の発砲問題について」  
30-33頁をもとに筆者作成。

1944年9月、大本営は捷号決戦方面を比島方面と概定し、優先的に準備を進めることとされた後も、硫黄島を含む小笠原方面において状況により決戦を指導するとの方針を変更しなかった。その後、比島方面の捷一号作戦の戦況を受け、1945年1月に新たに策定された「帝国陸海軍作戦計画大綱」では、本土等における決戦のため、硫黄島において敵にでき得る限り抵抗し出血消耗を図る方針へと変化した<sup>42</sup>。

離島作戦は、陸海空の戦力の結集を必要とする、典型的な統合作戦である<sup>43</sup>。そのため、戦略目的を達成するために陸海軍が戦闘目的を共有し、一連の活動を統合することが必要となる。しかし戦略次元を担う大本営において、硫黄島の防備に関して明確な目的を示すことができていなかった。そのため、陸海軍部隊は構想の段階からそれぞれの方針に基づいて作戦を進めて行くこととなった。

### (3) 作戦次元における分析

#### ア ガダルカナル戦

作戦次元における分析のため、ガダルカナル戦の緒戦において、戦略次元に属する大本営が策定した陸海軍中央協定、作戦・戦術次元に属する陸海軍現地協定と連合艦隊の作戦を4つの質問(Ends, Ways, Means, Risk)で分析する。

連合軍に上陸され、第1次ソロモン海戦の後、結ばれた中央協定(1942年8月12日)では、ソロモン諸島の要地を奪回することを方針とした<sup>44</sup>。

<sup>42</sup> 防研戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈7〉』214頁。

<sup>43</sup> 下河邊宏満「硫黄島作戦の一考察—海軍砲台の発砲問題について」『軍事史学』第30巻第1号、1994年6月、32頁。

<sup>44</sup> 防研戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈3〉』151頁。

本中央協定は、同年7月28日の中央協定を土台にしており、その際の **Ends** は、ポートモレスビー等の要地を攻略確保するとともに、東部ニューギニア一帯の敵を掃滅し、ソロモン群島の利用と相まって珊瑚海を制圧することであった<sup>45</sup>。その **Means** として、海軍は第8艦隊、第11航空艦隊、第2艦隊及び第3艦隊とし、陸軍は第17軍を指定した。その **Ways** として速やかに出発できる第17軍の一部をもってガダルカナル島所在の敵を撃滅、同地の要地、特に飛行場を奪回することとされた。同時に大本営陸軍部では、戦機を重視し一木支隊と海軍陸戦隊のみをもって速やかに奪回することが良いという旨の意図を第17軍に示した<sup>46</sup>。一方、連合艦隊は、大本営海軍部と考への相違が存在し、あらゆる好機をとらえて米艦隊を撃滅するという観念が強かった<sup>47</sup>。

第11航空艦隊、第8艦隊、第17軍により現地協定（8月13日）が結ばれた。情勢は、敵兵力は有力部隊ではなく、攻撃を延期することは私の不利を増大させるものであるとして、速やかにガダルカナル島所在の敵兵力を撃滅し、ガダルカナルを確保するとされた。その **Means** として、一木支隊、横須賀鎮守府第5特別陸戦隊及び護衛隊の直接護衛兵力を駆逐艦6隻、間接護衛兵力を第6戦隊とした。**Ways** として、8月18日以降2回に分け駆逐艦及び輸送艦で一木支隊等を上陸させ奪還することとされた<sup>48</sup>。

現地協定において一木支隊等を送ることとしたが、連合艦隊は米機動部隊の出現に備え、敵空母出現の場合は奪回作戦を延期又は取りやめることとした<sup>49</sup>。また、輸送のための艦艇を十分に出さず、2回に区分して輸送することとなり、陸軍戦力の集中を阻む要因となった。結果として過少に評価していた連合軍に対抗する陸軍兵力を更に分散し、陸軍の作戦遂行を阻害することとなった。また、艦砲射撃等も計画せず、空母の安全を図り空母機動部隊も陸上航空基地攻撃を極力避けた。これらは中央協定で期待される **Ends** の達成には合致しない取り決めや計画であり、作戦が失敗する可能性を高めた **Risk** であったといえる。

<sup>45</sup> 同上、33頁。

<sup>46</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部〈3〉—昭和十七年八月まで』朝雲新聞社、1972年、508-512頁；防研戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈3〉』151-155頁。なお、第11航空艦隊は基地航空隊、第4艦隊は内南洋部隊、第8艦隊は外南洋部隊である。

<sup>47</sup> 防研戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈3〉』154頁。

<sup>48</sup> 同上、149-155頁。

<sup>49</sup> 同上、156頁。

結果として、ガダルカナル島の飛行場が連合軍の航空基地となると、その攻撃圏内に輸送することは困難となり、十分な兵力増援を実施することができなくなった。重火器を手に入れられない陸軍部隊は、連合軍と陸上戦闘を行う基盤を失うこととなった。作戦次元において、Risk 評価を正しく行っていなかったことがいえる。

表4のとおり、作戦当初の各軍種の Ends-Ways-Means を考えると、作戦次元の中においては、海軍には米機動部隊の撃滅という Ends があり陸海戦力の統合発揮という点が不足していたといえる。

表4 作戦次元における Ends-Ways-Means

	Ends	Means	Ways
大本営 陸軍部・ 第17軍	ガダルカナル島奪回	第17軍	戦機を重視し小規模な兵力で速やかにガダルカナル島を奪回
大本営 海軍部・ 連合艦隊	ガダルカナル島奪回 ・米機動部隊の撃滅	第2、3、8艦隊、 第11航空艦隊他	連合艦隊の総力をもって、ガダルカナル島所在の敵を撃滅、飛行場を奪回／米機動部隊を撃滅

（出所）防研戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈3〉』141-155頁をもとに筆者作成。

ヴェゴが、沿岸部や狭い海において、陸上作戦と緊密に関連した海上作戦が主流になると述べているとおり、島嶼部における作戦においては、海軍は陸軍の作戦と緊密に連携しなければならない<sup>50</sup>。ガダルカナル戦においては、戦略次元と作戦次元における各 Ends-Ways-Means が水平方向・垂直方向に密接に交わることなく、齟齬が生じていた戦いであったといえる。

#### イ 硫黄島の戦い

次に硫黄島の戦いの作戦次元にあたる小笠原兵団及び連合艦隊について分析する。まず Ends について、小笠原兵団は大本営から1944年7月1日の大陸命第1045号で「小笠原兵団長ハ海軍ト協同シテ来攻スル敵ヲ撃滅

<sup>50</sup> 同上、149-155頁。

<sup>50</sup> Milan Vego, “Operational Warfare at Sea: Theory and practice,” Routledge, 2017, pp. 42-54.

シ小笠原群島ノ要域ヲ確保スベシ」という任務が付与された。これを受け小笠原兵団長の栗林中将は、米軍が硫黄島に來攻する公算が大として司令部を設置した。そして硫黄島戦闘計画を策定し、全島を要塞化して火力と適切な逆襲等により敵戦力の消耗に努める方針とした<sup>51</sup>。一方、連合艦隊は基地航空部隊による敵艦隊等の撃破を方針とした<sup>52</sup>。しかし、米機動部隊の空襲により硫黄島に配備された航空機は消耗し、基地航空兵力による作戦遂行は困難な状況となった。それ以降も作戦の方針について変更せず、具体的な運用の見込みのないまま飛行場の確保に固執することとなった。

次に **Ways** について、栗林中将は大本營の水際撃滅の方針と異なる後退配備の方針を選択した。これはサイパン戦の教訓を受け、米軍の圧倒的な火力により上陸前に水際陣地が容易く破壊されたことを踏まえての判断であった<sup>53</sup>。また同じくしてマリアナ沖海戦において海軍の機動部隊が壊滅し、孤立無援であることを前提とせざるを得ないことを認識したことも考えられる<sup>54</sup>。一方、連合艦隊は、基地航空兵力による航空作戦実施のため飛行場確保が絶対に必要であり、飛行場の海側にトーチカを構築して水際撃滅方式を主張した<sup>55</sup>。そのため、現地で陣地構築等の方針で齟齬が生じ、協同作戦の遂行に影響を及ぼす原因となった。

さらに **Means** については、大本營の中央協定に基づき、「硫黄島の防衛に関する陸海軍協定」を締結した。しかし本協定において作戦方針や準備といった規定は見当たらない。よって陸海軍が各個にそれぞれの方針に基づいて作戦準備を進めていたものと考えられる。その一例として、作戦資材の配分について、栗林中将は陸軍参謀次長宛に1945年3月7日に発信した膽参電第351号の中で「海軍ノ投入セシ物量ハ陸軍ヨリ遙カニ多量ナリシモ之ガ戦力化ハ極メテ不十分ナリシノミナラス、戦闘上有害ナ施設スラ実施スル傾向アリシニ鑑ミ、陸軍ニオイテ之ガ干渉指導ノ要アリ」と指摘している。また「使用飛行機モ無キニ拘ラス敵ノ上陸企図濃厚ナリシ時機ニ至リ中央海軍側ノ指令ニ依リ第一、第二飛行場拡張ノ為、兵力ヲ此ノ作業ニ吸引セラレシノミナラス陣地ヲ益々弱化セシメタルハ遺憾ノ極ミナリ」と指摘している。そして「陸海軍ノ繩張的主義ヲ一掃シ、両者ヲ一元

<sup>51</sup> 陸戦史普及会編『硫黄島作戦』54-55頁。

<sup>52</sup> 防研戦史室『戦史叢書 大本營海軍部・連合艦隊〈7〉』214頁。

<sup>53</sup> 下河邊「硫黄島作戦の一考察」21頁。

<sup>54</sup> 白井明雄「栗林將軍は如何にして「洞窟戦法」を創案したか」『軍事史学』第30巻第1号、1994年6月、53頁。

<sup>55</sup> 防研戦史室『戦史叢書 大本營海軍部・連合艦隊〈7〉』215頁。

的ナラシムヲ根本問題トス」と総括するなど、陸海軍で効率的な協同作戦を準備、実施する態勢が構築できなかったものと考えられる。

このように作戦次元における各軍種の Ends-Ways-Means を整理すると表 5 のとおりであり、陸海軍で作戦方針が大きく異なっていたといえる。

表 5 作戦次元における Ends-Ways-Means

担 当	Ends	Ways	Means
小笠原兵団 (陸軍)	小笠原群島の要域確保	長期持久 縦深後退	地形地物の利用による強固な陣地構築 籠城による出血強要
連合艦隊 (海軍)	米艦隊等の撃滅	航空兵力の集中 水際撃滅	基地航空部隊の配備 飛行場の造成、保持

(出所) 下河邊「硫黄島作戦の一考察」30・33頁をもとに筆者作成。

史実において、米軍は3日間にわたる爆撃と艦砲射撃を事前に行い、飛行場周辺をはじめとする水際配備のトーチカは上陸前に壊滅したが、地下陣地の将兵や装備の損耗はきわめて軽微であった。そのため日本軍は上陸した米軍に多大な損害を与え続けることができた。栗林中将は、硫黄島失陥の Risk として、本土が更なる大規模な空襲に見舞われることを認識していた<sup>56</sup>。圧倒的な米軍の戦力を前に硫黄島の確保は最終的に困難としても、採るべき方策として与えられた条件と地形を最大限利用して敵に出血を強要し長期持久を図ることが任務に最も寄与できると判断したものと推察できる。こうした栗林中将の戦局を踏まえた判断に対し、陸海軍間で方針の一致を見ないまま硫黄島の戦いは推移し、異なる軍種を運用することの難しさを示した戦例と言える。

### 3 作戦術の観点による失敗の要因

大本営はガダルカナル戦及び硫黄島の戦いにおいて戦略を策定し、それに基づき陸海軍がそれぞれ作戦を計画及び実行していずれも敗北することとなった。日本軍は、初めにグランドデザインや原理があったというより

<sup>56</sup> 梯久美子『散るぞ悲しき—硫黄島総指揮官・栗林忠道』新潮社、2005年、69頁。



は、現実から出発し、状況に応じて時には場当たりの対応し、それらの結果を積み上げていく思考方法であったとされる<sup>57</sup>。日本軍はこうした失敗を続けていった要因について、作戦術の観点から分析する。

### （1）戦略次元における Ends の相違

作戦術において、最も考慮しなければならないのが「目的」である。すなわち、すべての行動は、目的を達成するように仕向けられなければならない。戦略目的は、DES に密接に結びついている。作戦を計画する上で、政治、外交、軍事、経済、社会、情報、環境及び紛争に関連するその他すべてを網羅した上で、国家レベルの DES を明らかにし、戦略目的を設定しなければ、その作戦計画は DES を満たすことはできないということであるといえる。

いかなる軍事上の作戦においても、そこには明確な戦略ないし作戦目的が存在しなければならない<sup>58</sup>。ガダルカナル戦では、戦略的守勢による長期不敗態勢の確立を志向する陸軍と決戦を志向する海軍とで目的に齟齬が生じることとなった。こうした方針の不一致により日本軍は最も避けたかった巨大な消耗戦に引き込まれ、戦力を大きくすり減らせる結果となった。硫黄島の戦いにおいても、要塞化して長期持久を志向する陸軍と、基地航空兵力による敵来攻兵力の撃破を志向する海軍で作戦方針に意思統一を図ることができなかった。その結果、硫黄島が失陥してマリアナ方面からの日本本土への爆撃は強化され、日本の戦争継続に更なる大きなダメージを与えることとなった。

日本軍の陸海軍協同作戦は、陸海軍ともに目先の軍事的目的に固執し、往々にして両者の妥協による両論併記の折衷案が採用されることが多かった<sup>59</sup>。大局的視点から戦争への勝利を目指すグランドデザインに欠けていたことは、戦略と戦術を効果的につなぐ作戦術の観点から適当でないと判断できる。このように陸海軍で政治、外交、軍事、経済、社会、情報、環境及び紛争に関連するその他すべてを網羅せずに達成すべき DES があいまいとなった結果、大本営からの意図、命令、指示があいまいとなり、作戦に失敗したものと考えられる。

---

<sup>57</sup> 戸部他『失敗の本質』285頁。

<sup>58</sup> 同上、288頁。

<sup>59</sup> 戸部他『失敗の本質』274頁。

## (2) 作戦次元における **Ends-Ways-Means** の不一致

ガダルカナル戦や硫黄島の戦いにおいて、戦術的に勝利した場面はあったものの、結果的には戦略目的を達成することができなかった。戦いに勝利するためには、戦術的勝利があっても、それが戦略目的の達成に寄与しなければ意味をなさない。過去のすべての戦争の勝敗は戦術次元ではなく、戦略次元かつ作戦次元で決定されているとヴェゴは述べている<sup>60</sup>。ガダルカナル戦においては、作戦次元を担う連合艦隊にその視点がなかったことは、連合艦隊が第二段作戦策定時、戦略次元に踏み込み大本営海軍部と意見が衝突し、海軍部が連合艦隊の考えに引きずられた要因ともいえる。また硫黄島の戦いにおいても、連合艦隊は基地航空戦力を大幅に喪失した後も、敵艦隊の撃破に固執し長期持久を目指した小笠原兵団と作戦方針を異にした。作戦術の観点から分析すると、作戦次元において戦術次元と戦略次元をつなぐことができず、結果として戦略目的の達成に寄与できなかったとみることができる。

## (3) 硬直化した作戦思想

大東亜戦争時の日本軍の指揮官は、概して著しく融通が利かなかつた。既に計画がすたれている状況に変化しても計画に固執したとヴェゴは指摘している<sup>61</sup>。当時の日本は戦い方の定石に縛られ、情勢に柔軟に対応できなかった点や軍事組織の戦い方を律するドクトリンの開発という思考法に欠けていた点が協同作戦を阻害した要因と考えられる。

例えば、日本海軍の兵術思想の根拠となる「海戦要務令」は、海上戦闘における問題解決のための方法論を組織として共有することが目的であった<sup>62</sup>。しかし、1920年の改正以降は戦闘の原理原則となり、戦史から導出された諸教訓、答えを現実巧みに適用していく主観的判断の傾向がみられるようになった。時代を経て、戦闘の原理原則である「海戦要務令」という結論を徹底するようになると、用兵思想の固定化につながった。「海戦要務令」が本来期待されたはずの方法論ではなく、戦闘の原理原則を示すものとなった<sup>63</sup>。日本において状況判断は、全海軍レベルで必要な手段ではなく、艦隊すなわち作戦次元での活用に留まっていた。海戦要務令では状況判断を、作戦計画の一部として扱っていた。つまり日本海軍の状況判断

<sup>60</sup> Vego, *Operational Warfare at Sea*, p. 20.

<sup>61</sup> *Ibid.*, p. 234.

<sup>62</sup> 北川「軍事組織における問題解決の方法論に関する研究」101頁。

<sup>63</sup> 同上、99頁。

は、作戦次元レベルでの状況判断であったといえる。状況判断によって、その都度最適解に基づき作戦を遂行するより、出ている我の諸方策に状況判断を当てはめるといふ柔軟性を欠く実態になった<sup>64</sup>。

一方、柔軟な発想と応用を導く、作戦術に相当する、戦略、戦術、後方支援を活用し、国家としての制海権の獲得と行使を対象とする「戦争の術と学」を発展させていた米国は、総合戦力という見方を重視し、統合性の高い水陸両用作戦ドクトリンを開発して陸海空の戦力を大規模かつ効果的に発揮していった<sup>65</sup>。ドクトリンは組織を統合し、つなげる重要な役目を有するものである<sup>66</sup>。2014年の英国統合ドクトリンにおいて「共通の目的、明確に定義され受け入れられた責任分担、および他者の能力と限界を理解することが集团的努力を最大化するための不可欠な要素となる。」と述べられている<sup>67</sup>。日本軍は、サイパン島をはじめとする中部太平洋の島嶼戦での戦訓や彼我の戦力差を踏まえ、陸海軍が一致してドクトリンを開発することは最後まで実現できなかった<sup>68</sup>。

## おわりに

本稿では、なぜ大東亜戦争における島嶼戦において日本陸海軍はそれぞれ作戦方針が異なり、認識が異なったまま作戦が実施されることとなったのかという問題認識に基づいて、作戦術の観点から分析した。

第1節では、作戦術という概念が創出され、以後発展してきた経緯について俯瞰するとともに、その意義について整理した。「作戦術」は戦略目標を達成するため、戦略と戦術を効果的に調和させる方法論であり、またドクトリンの基礎をなすものであることが確認できた。

第2節では、大東亜戦争におけるガダルカナル戦と硫黄島の戦いを事例とし、作戦術の視点から見た陸海軍協同作戦の分析を行った。戦争の次元の各次元に分類した上で分析することにより、異なる戦いでありながらも戦争における日本の陸海軍の戦略と作戦、戦術の乖離が確認できた。

第3節では、作戦術の観点による失敗の要因は、目的の相違であること、戦略・作戦次元での **Ends、Ways、Means** のつながりの欠落を整理した。

<sup>64</sup> 同上、103-112頁。

<sup>65</sup> 同上、52頁；戸部他『失敗の本質』320頁。

<sup>66</sup> 北川敬三「知的組織としての英軍の変容—「作戦術」とドクトリン制度化の視点から」『防衛学研究』第56号、2017年3月、43頁。

<sup>67</sup> Ministry of Defence, *AJP-5 Allied Joint Doctrine for Operational-Level Planning*, June 2014, p. 1-3.

<sup>68</sup> 戸部他『失敗の本質』321-325頁。

ガダルカナル戦の敗因は、第二段作戦を構想し、計画を策定するにあたって、陸海軍統一の東方重視の基本戦略を確立するに至らなかったことに起因するといわなければならない。すなわち、陸海軍は第一段作戦においては、南東地域の占領という目標の下に重点指向が統一されたが、第二段作戦に移行するやそれぞれ我が道を進んだのである<sup>69</sup>。

硫黄島の戦いの敗因は、戦略次元である大本営において状況により決戦を行うというあいまいな作戦指導が、作戦次元における陸海軍間の協同作戦に影響を及ぼしたことである。また、刻々と変化する情勢に応じ、陸海軍が従来の思想から脱却できなかつたことも悪影響を及ぼした。

いずれの戦いも、軍事行動における陸軍と海軍の共通の目標、つまり戦略次元における目標が一致又は明確でなかつた。戦略-作戦-戦術次元の垂直的次元同士の相互作用と、各次元の水平的側面の相互作用は結合し、衝突しているのである<sup>70</sup>。戦略次元において共通認識をもっておらず DES が異なっているということが大きな問題であった。そして、戦略次元の下位である作戦次元でもまた、上位の目的を達成するための状況判断ができていなかつたのである。

戦史の分野では、これまでも様々な視点で考察が行われているが、今回作戦術という視点で分析整理して、作戦失敗の要因を明らかにできたことは、戦史研究の手段としての作戦術の有効性を確認したといえる。作戦術は各軍種の壁を越え、統合軍の運用の方法論として位置づけられつつある<sup>71</sup>。現在、わが国において南西方面における島嶼防衛が注目され、陸海空自衛隊による統合運用をもってその強化を図ることが推進されている。過去の実例である大東亜戦争における日本陸海軍の協同作戦を、作戦術によって分析することは、現代に多くの示唆を与えるものである。

---

<sup>69</sup> 外山三郎『敗因究明に主論をおく太平洋戦争史IV-ガダルカナル海戦、ソロモン・ニューギニア海空戦及びアッツ島沖海戦』教育出版センター、1985年、126頁。

<sup>70</sup> エドワード・ルトワック『エドワード・ルトワックの戦略論-戦争と平和の論理』武田康裕、塚本勝也訳 毎日新聞出版、2014年、208-209頁。

<sup>71</sup> 齋藤大介「戦争を見る第三の視点-「作戦術」と「戦争の作戦次元」」『戦略研究』第12号、2013年1月、89頁。